

# 『しゃんぷう屋』 第1話

1月のお客様

金庫の鍵を開けることができたクセ毛さん

杉山 めぐみ 明久実

生きるということはとても孤独  
自分が今ここにいることも  
生きていること自体も息苦しくなる  
迷路の中のねずみのように  
どこへ向かえばいいのかわからなくなる  
人ごみの中で迷子のように立ちすくむ

人生ってどうしてこんなに面倒なんだろう？

他の人には当たり前のことが、私には難しい。

『男性と普通にお話しすること』

たったこれだけのことが私にとっては、とてもハードルが高い人生の宿題。

自分の父親と弟と話をするのが精一杯。

彼らは、人間のオスという種類に分類されるけど、私に言わせればあれは別の生き物。

全く感性が違っていて、かみ合うポイントが見つからない。

でも、男性と関わらなくたって別段何の不自由も無く暮らせる。

中学からずっと女子校を選び、今も女の子向きの洋服と雑貨を扱うブティックに勤めている。

なのに、昔から周りの女友達は「彼氏を作れ」ってうるさくおせっかいを焼く。

「人のことはほっておいて」と心から叫びたい。

でも、それさえできない私がここにいる。

結局、「人とコミュニケーションをとるのが苦手」ということになるんだろう……

共通の話題が見つかるから、女同士の付き合いは成立しているだけで、そもそも『人と普通にお話しすること』自体が得意分野ではない。

そんな私が接客業を仕事に選んだときには、家族一同がびっくりした。

だけど職場に女性が多くて、上司やお客様や相手先も女性なんていう会社はまずないでしょ？

だから就職活動の時、色々な会社を片っ端から調べ、社長も幹部をはじめとする主要人物も女性ばかりだという今の会社をやっと発見した。

しかも、このアパレルメーカーが作っている製品はまさに好みの路線。

職場は店舗になることが目に見えていたけれど、お客様が女性なら何とかなるだろうって思ってトライした。

実際に現場に出てみたら、私のペースでもお客様の対応には困ることが無かった。

それどころか、私が自分の好みのコーディネートを提案するとお客様が喜んでくださり、

私に選んで欲しいと言って、リピーターになってくださる方までいる。  
結局、新卒時点からずっと勤めて、間もなく10年目に突入しようとしている。

ただ30歳を目前にした今、困っているのは親に会うたび「結婚しないのか？」と迫られたり、「あなたのために企画したのよ」と言って同僚から合コンに誘われること。  
お願いだからほっておいてと思うんだけど、世間からずれているのは私の方。  
それはちゃんとわかっている。

普通なら、男性に興味を持ちお付き合いして結婚して子どもを産む。

それは、当たり前のこと。

だから、女の子達は少しでも良いきっかけを求めてコンパやパーティにも参加する。

頭では理解できる。

でも私は、たった今も新年会にかこつけた合コンの誘いに辟易している。

街中でも、パーティみたいな場所でも、大勢の人の中になると、すごく孤独な気分になる。

私は、変なんだろうか？

身体がすくんでどうしたらいいのかわからなくなる瞬間がある。

男性が苦手な上にこんな気分になるので、できれば参加したくない。

ほんと、断ればよかった。

せっかく明日はお休みの日だって言うのに、前の晩からこんなに気が重くなっている。

洗面台の鏡に向かって化粧を落としながら、自分のバカさかげんにあきれ、クレンジングで眉毛が半分になった顔からため息がもれた。

そして、ぬるま湯で顔を洗いながら、さらにげんなりした。

また、排水口が詰まって水が流れない。

大分前からつまり気味でだましだまし使っている。

管理人さんに相談したら、水道屋さんを自分で呼ぶように言われた。

「水道屋さん」とか「大工さん」とか、あの手の職種の男性が一番苦手、それこそ感性でかみ合うポイントは皆無じゃないかしら？と思う。

できれば、この部屋に、あまりお迎えしたくない。

この部屋は一人暮らしとしては、とても贅沢なマンション。

絶対に結婚するなんて考えられないし、実家は弟が継ぐだろうから、自分の将来は自分で考えなくっちゃって考えて、「2LDKのマンションの購入5ヵ年計画」をちゃんと5年間実行し、昨年とうとうその夢をかなえた。

この先ずっと一人で住めるよう住環境も資金計画もしっかりたてて、選びに選んだマンション。

すごく気に入っている。

とりあえずは30年ローンだけど、頭金を貯蓄したペースで返し続ければ半分の15年で返せるはずだ。

家具も、カーテンも小物も全てお気に入りのものを1年がかりで揃えた私のお気に入りのスペース。

相手の気持を考えずに土足で上がりこみそうな勢いの人種は、できる限り遠ざけたい。

まだ大丈夫。

ほら、水が引いたわ……

めいる気分を脱ぎ捨てるように、服を脱衣カゴに放りこみ、シャワーを浴び、髪を洗った。

さっきまでのことは忘れて、マンションにしては広めのバスルームで気分を切り替えた。

お風呂上りにパソコンの電源を入れ、ダウンロードしてある音楽を、ランダムに流すようにセットをした。

お茶をいれ、音楽を聴きながら髪を乾かした。

私の髪はすごく細くて、くせっ毛。

単にウェーブがかかっているだけなら良いんだけど、かなり縮れている髪が1%くらい混ざっているため見た目も良くないし、めちゃくちゃ絡み合っただけで櫛が通らない。

美容室に行くと、一見少なそうに見える髪は、実は多くて扱いにくいので美容師さんに嫌がられる。

ほんと、乾きやしない。

細い髪は水分をしっかりつかみこむし、櫛どおりも悪いので、なかなか乾かない。

しかもこうやって一生懸命乾かしても、明日の朝には四方八方好き勝手な方向を向く。

必ず、朝は朝でセットしないと人前にはとても出られない。

ストレートヘアーの人がつくづくうらやましく感じる瞬間だ。

「何か、いい方法は無いかしら？」と30年近く試行錯誤しているが、一向に見つからない。

本当に髪の悩みが解決したら、それだけでも人生はずっと過ごしやすいものになる。

そんな風に考えてしまうほど、私の髪は手がかかるし美しくない。

ストレートパーマも縮毛矯正も半月ともたず、髪をいためるだけに過ぎなかった。

クセ毛用シャンプーなんかは、高いだけでほとんど役に立ったためしが無い。

あっシャンプーといえば、もうすぐ無くなりそうになっていた。

次を買わなくちゃ。

私の髪の広がり方は、シャンプーの当たりはずれでかなり変わる。

その観点で言うと、今回のシャンプーは最悪。

コマーシャルに映っているあんなにさらさらのきれいな髪は、あのモデルさんの髪がもと

もときれいなだけに違いない。  
また、だまされた。  
次は、どれを買ってみようか？

せっかく、パソコンを立ち上げているので「シャンプー」と入力して検索してみた。

26,000,000件、あまりにヒット件数が多い。

「シャンプー クセ毛」と入れて検索しなおしてみる。

170,000件。

これでもすごく多いが、とりあえずざっとタイトルを見ていく中で、気になるページを開いてみて、さらに気になる広告やリンクされている他のホームページをネットサーフィンしていく。

そして、「森の中のサンルームで美しい女性がシャンプー専門の店をしている」というブログの記事を発見した。

そのシャンプーでクセ毛がとても落ち着いたという内容に興味を持ち、改めて店を検索しなおす。

ちょっと探ただけで、あっさりと見つかった。

ホームページを見てみると、びっくりしたことに、我が家から徒歩20分くらいの場所。

「森」となっていたのは、大きな公園のことだった。

確かにあの公園なら森のように木が生い茂っている。

あんなところにお店があるの？

近所なのに評判はまったく聞いたことが無い。

だけど、1日限定4人の予約は、向こう2週間はびっしりと詰まっていて、空き時間は無かった。

人気があるんだ。

なんとなくがっかりして、ブラウザの戻るボタンを押そうとした。

その時、何を間違えたか私の手は、三つとなりの更新ボタンをクリックしていた。

すると、当たり前だけど全く同じページが表示しなおされた。

ところがびっくりすることに、さっきは埋まっていたはずの明日の昼の予約に空きが一つできていた。

キャンセルだ！

人間の心理って変なものだ。

もしも最初見た時に空いていたなら、予約する事を躊躇したに違いないのに、この流れだと予約しないのはもったいない気がする。

結局、ちょっとだけ悩んだけど、行ってみようという気分になって、予約を入れた。

すぐに自動メールで「ご予約ありがとうございます。明日14時にお待ちしております」と

返事が返ってきた。

予約しちゃった……

なんとなくシャンプーを検索してただけなのに、『しゃんぷう屋』という店に予約を入れてしまうなんて……

普段は、こんな軽率な行動はまずしないのに、私ったらどうしちゃったんだろう？

でも、不思議なことにワクワクしてる自分がいた。

さっきまで、明日の合コンがイヤで、自分のクセ毛がイヤで、ブルーになっていたくせに、こんな訳もわからない店に予約したことで、こんなに気分が変化するなんてどうかしている。

まあたまには、こんなことがあってもいいのかもしれない。

「明日良いことがありますように……」と思いながら眠りについた。

しとすと雨が降っている？

枕の先の出窓越しに静かな雨音を感じたのだろう、まだ夢うつつ、夢の中でも雨が降り始めた。

ああ、雨ならまた髪が広がっちゃう。

広がる前に髪の毛を金庫の中にしまっておかけよう！

金庫の鍵ってどこ？

見つからない！！見つからない！！

どうしよう、約束の時間に遅れてしまう！！

はっとなって目が覚めた。

金庫の鍵？

ああ、夢よね……

なんて支離滅裂な……

だけど、ところどころに現実が入り込んだヘンテコリンな夢。

時計を見たらまだ7時。

髪に手を触れると、いつも以上に爆発している。

出窓のカーテンを開けたら、確かに雨。

冬は乾燥しているので、多少まとまりが良いのだが、湿度があると私の髪は簡単に膨れ上がる。

湿度計がわりになりそうな髪の手触りと広がり具合で、天気予報ができるんじゃないかしらと思う。

普通に考えたら、これからシャンプーしてもらわなければならないから、セミロングの髪を結ぶだけで出掛けてもいいんだろうけど、そこは見栄っ張りの私。

記事に書かれていた『しゃんぷう屋』の美しい女性に、みっともないサマを見られたくないと思っている。

いつも以上にスタイリング剤をたっぷりつけて念入りにブローした。

鏡の中で、たった今は結構きれいな髪型に縁取られた、まあまあイケテル女の子がにっこりしている。

だけど、こんなに一生懸命に整えても、何時間持つかしら？

おそらくは、表に出て湿気を感じたら、あっという間に元に戻るに違いない。

いつものこと。

ぐずぐずしていたら、あっという間に時間が過ぎ、結局遅めの昼ご飯兼用の朝ご飯を食べ、部屋を片付けた。

気づくと、もう1時。

まっすぐ歩けば20分だけど、久しぶりに散歩してもいいかしらと思ったので、一応合コンに通用しそうな服を選び、お気に入りの傘を持ってちょっと早めに家を出た。

最寄り駅は同じなんだけど、丁度駅をはさんで反対側なので、大きな森のような公園には、昨年引っ越してきてから1度しか行ったことがない。

そもそも駅の向こう側自体、用事が無いので3回くらいしか行ったことがない。

久しぶりに、駅の反対側の公園へ抜ける道を歩き始めると、以前には気づかなかった、かわいいカフェを発見した。

この駅には不似合いなこぎれいな店。

帰りに時間があったらよってみようかな？

今日は、よほど寒いだろう、傘に当たる雨粒が少しみぞれ霽っぽい。

吐く息が白い湯気のように目の前に広がる。

緩やかな坂を公園に向かって歩を進めると、以前に歩いた時の夏っぽいキラキラとしたイメージの空気とは全く違う、少し重たいモノトーンの空気が当たり一面に立ち込めていた。本当に緩やかな坂なのに上りきったときには、少し息が速くなっていてなまった身体が周りの空気と同じように少し重く感じる。

平坦な道になり、2階建ての住宅街の向こうにこんもりとした緑の塊が見え始めた。

公園まではあと少し。

木々が吐き出す新鮮な匂いに徐々に変わってきた。

緑の塊が次第に近づいて来たが、夏と違い葉が落ちて枝だけになった木が思っていたよりもずっと多くて、思い描いていた景色とまるで違う冬の公園がそこにはあった。

裸になった枝の隙間は灰色の空を映し出し、曇交じりの雨をさえぎることなく自分達の足の地面へと降り注がせている。

緑の葉をつけた木々は、寒空と雨粒を大きく開いた葉っぱでそっと支えている。

こんな都会の公園の中でさえ、姿かたちも性質もまるで異なるたくさんの種類の木々達が、真夏も真冬もじっと自分達の営みを黙々と繰り返している。

まるで、山の中か高原のような美味しい空気が、彼らの仕事の力を私に教えてくれる。

ちょっとぬかるんだ土の感触を、靴底を通じて感じる。

普段使っていない五感が刺激され、目、耳、鼻、口、肌、すべてが公園の空気感を自然に受け入れようとしているみたいだ。

夏じゃなくて冬だから、晴れじゃなくて雨だから、そして今日の私の気分だからそう感じるのかもしれない。

この感じに出会えただけでも、今日ここへ来てよかった。

たまには、近所の公園も利用しよう、せつかくこんなに大きな公園があるんだから……

ほぼぐるっと公園を一周し、地図に書いてあった『しゃんぷう屋』があるはずの区画にやってきた。

「一体どこにそんな建物があるのか？」公園を知っているだけに想像がつかなかったけど、確かに記事に書かれていた通り、公園の中に入り込んだような位置に数件の家が建ち、一番奥に当たる場所に、その家はあった。

木々の中に溶け込み、蔦が絡んだ小さな家はとても美しく独特なオーラを放っていた。

「中を早く見たい」

そんな逸る気持ちで『しゃんぷう屋』と書かれた小さなプレートの横のチャイムを鳴らした。

「どうぞ」という澄んだ女性の声が奥から響き、その声に誘導されて大きな木の扉を手前に引いた。

石でできた土間、最近のフローリングとはまるで違う素朴な感じの木の床、漆喰の壁、アルミサッシではないガラス窓、既製品ではない木の扉。

ちょっとしたギャラリーのような空間が目の前に広がった。

すらりとした女性が小さな猫を抱っこしてゆっくりと近づいてきた。

「いらっしやいませ。どうぞ」穏やかなやさしい声で私に声をかけると、リビングの奥にある螺旋階段を導くように先に上り始めた。

慌てて、用意されていた真っ白いスリッパに履き替え、後に続いた。

3階まで上るとそこはサンルームになっていて、大きな窓からは先ほどまでいた公園が一望できた。



もう既に私はやられていた。

完全に一目惚れ。

用意されている何もかもが美しく完成度の高い絵のように行き届いている。

壁にかかったタペストリー、床にじかに置かれたシンプルな照明、木の床にポツンと置かれた一脚の木の椅子。

おそらくどの角度に回ってみても絵になるはず。

見事に計算されている。

このことだけでも、この店とこの女性の質の高さがうかがえる。

本当に来てよかった。

私は、夢心地の中でその椅子にすっぽり納まり、彼女が入れてくれた香りの良いお茶をいただいた。

映画のスクリーンの中から飛び出てきたような、女優さんのようにきれいな女性は、飾り気の無いオフホワイトのワンピースに暖かそうなカーディガンを羽織り、お茶を飲む私を見守るように脇に立っている。

「髪に触ってもいいですか？」半分ほどになったお茶のカップを両手で抱え込むようにしている私に、やわらかい声で彼女は尋ねてきた。

「もちろんです。どうぞ」そう答えると、彼女の細い指が私の頭のとっぺんからすーっと毛先に向かって滑るように触れていった。

「通常はシャンプーの前に、ゆっくりお茶を召し上がっていただくのですが……、今日はシャンプーを長めにする事になりそうなので、早速準備に入らせていただきますね」

「私の髪は他の方と違うんですか？」

「少し、クセがありますよね？そのクセを抑えるためにスタイリング剤をたくさん使っていらっしゃるでしょ？」

ばれてる……

ちょっと触るだけでわかっちゃうんだ……

今朝の念入りブローは無駄な抵抗だった。

絶句している私をよそに、彼女は私の心に染み入るような声で続けた。

「最初は信じていただけないかもしれませんが、シャンプーと、シャンプーの仕方と、乾かし方と、梳かし方で、クセは落ち着かせることができます。その場合、コンディショナーやスタイリング剤はそれの妨げになるので、洗い流したいんですが、普通の2度洗いでは落ちないので時間をかけてシャンプーしたいんです。よろしいですか？」

「はぁ……お願いします」確かに半信半疑ではあるけれど、言葉通りであればそんな嬉しいことはないし、ここまで来てイヤだというのは意味がない。

彼女は流れるような身のこなしで、シャンプーの準備をしていく。  
美容室のようなシャンプー台を想像していたけど、白い湯気がふわふわと立ち上るピッチャーとシャンプーが木のワゴンに乗せられて椅子のそばに運ばれてきた。  
そして、木の台と大きな洗面器のようなホーロー引きの器が用意された。  
最後に座っている椅子の背もたれがカタンとはずれ平らになり足元に脚を乗せるためのツールが置かれ、私はほぼ平らに横たわるように仰向けになり、暖かな毛布が掛けられた。

シャワーではなくピッチャーから注がれるお湯で髪を洗われるのは初めての経験だったが、気持ちよかった。

たっぷりとお湯がかけられてから、シャンプーが始まった。

どうやらしっかり泡立てから丁寧に髪と頭皮を洗う。

そして流す。

もう一度シャンプーを泡立てて髪につける。

彼女の指が地肌に触れる。

程よい圧力が気持ちよく、ちゃんと洗い方を覚えておこうと思っていたのに、いつの間にか眠ってしまった。

「終わりました」という声でハッとなり目を覚ます。

どのくらい眠っていたのかまるでわからない。

あたりを見回して時計を探すと既に3時を回っていた。

40分以上洗っていた計算になる。

大判の真っ白なタオルで頭をすっぽり包まれたまま、身体を起こされ椅子の背もたれが元に戻された。

やさしく丁寧にタオルドライした後、ドライヤーの穏やかな温風で髪が乾かされ始めた。  
普通美容室では、ブラシでめいっぱい引っ張りながら乾かすのに、彼女のやり方は違っていた。

白く細長い指で私の髪を優しく掻き上げるだけで、その後はサーっと毛先まで指を通していく。

サーっと指を通していく。

そう、サーっと指を……

えっ？指が通る？そんなバカな！！

私の髪に指が通る訳がない！

しかも、洗ったばかりのぬれた髪にどうすれば指が通る訳????

ありえない状況にびっくりしながら息を殺すように彼女のする事をじっと観察してみた。

額の辺りの生え際に指をあて、頭皮に少し圧力をかけて後ろに滑らすように髪の間を指が通過する。

どう考えても、特別な事をしているようには見えなかった。

ドライヤーのスイッチが切られ、ワゴンの上にコトンと置いた。

彼女は、もう一度私の髪に触れ額の生え際から頭頂部、そして後頭部、毛先へとゆっくりと指を通し、「終わりました」と声を発した。

私は、自分の髪に手を触れびっくりした。

私の髪じゃない。

軽くてさらさらしていて指がすーっと通っていく。

鏡を見せてもらったけど、朝の念入りブローの時とは全く違う自然な感じの女の子の顔が映っていた。

「どうして、手櫛だけのブローでこんなにクセが落ち着くんですか？」聞かずにはいられなかった。

「特別なことはしていないですよ」

「ええっ？でも、スタイリング剤も使わずブローで引っ張りもせず・・・こんなことって・・・」

「私は、人からああしなさい、こうしなさいって言われるのがすごく苦手なんです。きっと髪の毛も同じなんだと思うんです。だから好きにさせてあげられるようにブローしているだけなんですよ」

なんて発想だろう。

でも、理にかなっているように思えた。

私が、頭の中で彼女の言葉の意味を噛み砕いていると、彼女はさらに言葉を続けた。

「日本人の髪の毛って、特に日本女性の髪は、世界中の色々な人種の中でもとってもよい髪質を持っているらしいですよ。丈夫でつややかでまっすぐで・・・だけど、最近はとっても痛んでいて昔のようではなくなってしまったみたいです。きっと環境の変化や食生活なんかで変わってきてしまったんでしょうね。とても残念です。でも、元に戻すことはできると思うんですよ。自然をお手本に見直していったら、無理な事を減らしていったら、少しずつ戻るんじゃないかと思っているんです」

「でも、戻すといっても私の髪は生まれつきのクセ毛ですよ」

「そうですねー、じゃあ公園の木を見てください。彼らは、肥料をもらっていませんし、剪定もされていません。でもきれいでしょ？お日様の光と空気と土と水と・・・そして

人間にはわからないけど、動物や虫や微生物にささえられながら、じっと自分の命を輝かせている。彼らは思うとおりに枝を伸ばしていますけど、絡み合っていませんし、私の目には美しいと映ります。今のあなたの髪もとてもきれいです。そう思いませんか？」

「ええ、自分の髪じゃないみたいに気持ちのよい手触りで見た目にもきれいです」

「それが、本当のあなたの髪ですよ。きっとあなたらしくあなたにぴったりの……確かにちょっとクセはあるかもしれないけど柔らかいウェーブで繊細で……きれいです。自然をお手本にしたケアをしていけばもっときれいに輝きますよ」

「本当ですか？私にもできますか？」

「もちろんです。だって私は特別なことは何もしていないんですよ。もっとも、植物の力だけで作られたこのシャンプーのおかげはとても大きいですけど……これが無ければ、本当に私の力じゃ何もできません」

「シャンプーですか？」

透明なボトルに入ったシャンプーが光に透けて金色に輝いている。

「お花も別にきれいに咲こうと意識なんてせずに自然に任せて自分の役割を演じているだけ。無理はしないけど精一杯きちんと生きている。たぶん地球上で良かれと思ってむちゃくちゃな事をしているのは人間だけなんじゃないかしら。文明や化学を否定しようとは思いませんが、自然界の大きな循環と営みに逆らってもそこにはひずみしかないような気がしてなりません。せっかく人類が築きあげてきた文明の理論を自然界に照らし合わせて見直したら、素晴らしいものになるんじゃないかって……私なりに思っているんです。とは言っても、私にできることはシャンプーだけなんですけどね……」

「人間だけなんですよ、頭にだけ集中して毛が生えていて、それも長く長く伸びる動物は……、しかも、切っても痛くなくて、こんなに持ち主の気持ちを反映させて自己表現できるなんて、他には無いんです。だから、その大切な髪を私は洗ってあげたいんです。髪はあなたの分身、気分の代弁者ですよ。大切にしてくださいね」

ほんどだ、今までそんな風に考えたことが無かったけど言われてみるとその通りだった。

そして、彼女からこの言葉をもらって、心の変化に気がついた。

私は今まで、髪をまっすぐにしたい一心でコンディショナーをたっぷりつけ、スタイリング剤をいっぱいつけ、無理やり引っ張って髪を伸ばしていた。

この店で、それを全部洗い流された。

引っ張らずに緩やかに流すように乾かした。

今までは、目には見えないベールで何重にもコーティングされていた髪の毛が、ゆで卵の殻を剥くようにツルン向かれた感じだ。

さらさらなのに、しっとりしている。

あまりに気持ちがよくて髪を触り続けていたら、私の生き方や考え方ももしかしたら何重にもコーティングされていて、本当の自分が分からなくなっているんじゃないかという気分になってきた。

シャンプーの仕方を教わって、その植物 100%のシャンプーを分けてもらって、店を出た。

雨が上がっていた。

間もなく4時になる。

冬の夕暮れがもう迫っていたが、雨上がりの空気は雲の切れ間から差し込む静かな太陽の光を浴びて、穏やかに輝いている。

公園の木々の呼吸が聞こえてくるんじゃないかと思うくらい静かで、これが家からわずか20分の場所とは思えなかった。

静寂を破るように一羽の鳥が日常ではなかなかお目にかかれない広い空を横切っていった。

生きるということはすごい奇跡  
自分が今ここにいることも  
生きていることも素敵だと思えた  
迷路に見える入り組んだ道も  
宿題を解くための人生の小道具  
たくさんの命が支えなくては  
たった一つさえ輝けない

私の生き方もゆで卵の殻を剥くようにつるりと向けていく予感がした。

今日は新年会だ。

今年はよい年にしよう。

時間がまだあるから、さっき見つけた駅前のカフェによって「今」という時間を楽しもう。